



Vol.31 **イングリッシュキャンプを発案**
 さとう みのる
佐藤 稔さん

中学生を対象に海外を疑似体験する町教育委員会主催の「厚真町イングリッシュキャンプ」。今年も農家民宿で8月と9月の2回行われました。日本語の使用は厳禁で、A・L・Tを相手に海外での生活に限りなく近い環境で過ごします。同キャンプの発案者で、カリキュラムづくりを担う新町の佐藤稔さんに話を聞きました。

“ 国際感覚を養う場にしたい ”

佐藤さんは、平成29年に鎌倉市から厚真町に移住。オーストラリアで就職するなど海外での経験も豊富で、地域おこし協力隊を経て、現在、京町で貿易会社を営んでいます。イングリッシュキャンプの発案は、新型コロナウイルス感染症がきっかけでした。町では、中学生の海外派遣事業を行っていましたが、令和2年はコロナ禍で事業が中止。「私にとって、中学時代は楽しい思い出ばかり。事業の中止は、自分事のように悔しく、何か生徒たちにしてあげたい」と考え、海外を疑似体験する場の提供を思いつきました。

コンセプトは、英語でのコミュニケーション力の向上。キャンプ中は、間違いを恐れず、英語で自分の気持ちを伝えることに徹します。模擬のパスポートを使った入国審査に始まり、面替やレストランでの注文、体調不良の際の病院受診など、海外生活を想定した場面を設定しています。「言葉が話まっても、ジエスチャーで意思を伝えようとする生徒もいます。積極的な子はより積極的に、物静かな子も社交的になります」と、佐藤さんは子どもの変化に目を細めます。講師役のA・L・Tからも「楽しい」と好評価です。

近年、町内の中学生から「英語を話したい」や「留学したい」という声が聞かれるようになりました。「私は教育者ではありませんが、このキャンプがきっかけで、国際感覚を持った子どもが一人でも多く増えてほしい」と佐藤さんは期待を寄せています。

かつて生活していたオーストラリアは、農地が広がりサーフィンのメッカでした。厚真町の景色と重なります。今は、地元の中学生在対象ですが、将来、本州の子どもたちとの交流に発展させたいと、佐藤さんは未来図を描きます。

「子どもたちの成長と町の活性化を図る事業にしたい。町への恩返りのためにも」

厚真で暮らす人、働く人、応援してくれる人、訪れる人・・・
 みんな、みんな、**ATSUMA LOVERS**